

Title	ソールズベリのジョンとアリストテレス：政治的徳性 (virtus) をめぐって
Sub Title	John of Salisbury and Aristotle
Author	柴田, 平三郎(Shibata, Heizaburo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.12 (1994. 12) ,p.113- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	内山秀夫教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19941228-0113">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19941228-0113</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ソールズベリのジョンとアリストテレス

——政治的徳性(virtus)をめぐる——

柴田平三郎

- I はじめに——「政治」観念の十三世紀起源説への疑問
- II ジョンとアリストテレス
- III ションの政治論における「中庸」の徳
- IV おわりに——ションの政治論と「オルガノン」

## I はじめに——「政治」観念の十三世紀起源説への疑問

現代の政治思想史家のひとり、ニコライ・ルビンシュタインは「初期近代ヨーロッパにおける政治(politicus)という言葉の歴史」と題する比較的最近の論稿(一九八七年)を次のように書き始めている。

「初期近代ヨーロッパにおける政治(politicus)という言葉の歴史は十三世紀に始まる。他の例の場合と同様に、近代の政治的語彙の起源は後期中世に求められねばならない。ソールズベリのジョンは既に『ポリクラティクス』のなか

でこの言葉を国家の諸制度を指し示すのに使用してはいた。また、『ディダスカリコン』において、サン・ヴィクトルのフーゴーも実践科学をそれぞれ *solitary, private*, および *public* なものに、そして *ethicam, oeconomicam et politicam* なものに区分することを試みてもいる。しかしながら、*politicus* という言葉やそれと同根の意味をもつ他の言葉がはっきりと中世の政治的語彙のなかに入ったのは十三世紀の中葉以降のことであり、それはアリストテレスの『政治学』と、それよりはやや影響は薄いが『ニコマコス倫理学』の翻訳の結果としてである。<sup>(1)</sup>

ルビンシュタインはこう述べて、その脚注に『ポリクラティクス』と、『ディダスカリコン』における各々の例文を引用しているが、念のためそこで紹介されている『ポリクラティクス』の条を書き出せば、それは以下のような二つである。

『トラヤヌスの教え』と銘うたれた小稿のなかにこの政治的構成体 (*politicæ constitutionis*) の各部分がでくる。(V, 2.)

「政治的共同体 (*politicæ rei universitas*) のなかに住んでいるすべての人がそれ〔法〕に従って生きるのは当然のことである。」(IV, 2.)

ルビンシュタインのこの論文は十三世紀のモエルベカのウィリアムによるアリストテレスの『政治学』のラテン語訳(一二五〇年代)を契機に *polis* から派生する *politicus* や *politikos* という言葉がトマス・アクィナス以後の中世思想家たちによってどのように受容され、初期近代に至ったか、をそれぞれの思想家たちの用法に即して丹念に追跡しており、その点においてきわめて有用である。

しかし、いま視点を替えて、十二世紀の人文主義者、ソールズベリのジョンの社会・政治思想に注目し、そこに窺われる「政治」の意味内容を考えようとするとき、ルビンシュタインの論文の背後にある基本的発想に、いささか問題を感ぜないわけにはいかない。

その最大のポイントは端的に言えば、西欧中世における「政治」観念の出現をルビンシュタインが中世後期のこと、つまりアリストテレスの『政治学』の導入のおこなわれた十三世紀中葉以降のことと見なし、それ以前の十二世紀の独特な思想的展開を単なるエピソードとしか捉えていない点にある。ここでは、いわゆる「十二世紀ルネサンス」を彩った多くの思想家たち——アベラルドゥス、クレルヴォーのベルナルドゥス、シャルトルのベルナルドゥス、シャルトルのティエリ、ギルベルトゥス・ポレタヌス、コンシュのギヨーム、ベルナルドゥス・シルヴェストリス、アランド・リール——の学問的営為は本格的な研究の対象とされてはならず、したがって中世政治思想史の上ではマイナーな位置しか占めてはいない。ソールズベリのジョンとサン・ヴィクトルのフーゴーの名のみを取り上げ、その著作と、そこに瞥見される言葉をわずかに脚注に引用するだけで終わっているのはそのなよりの証拠である。

もっとも、こうした見解はなにもルビンシュタインに限られたものではない。そもそも西欧中世において、「政治」や「国家」に関する自律的な観念が生じるのは十三世紀のアリストテレスの「発見」以後のことであり、それ以前の思想活動はおしなべて未成熟であるとするのは、むしろこれまでの中世政治思想史学の通説であったと言ってよい。たとえば、そうした見解の古典的な唱導者のひとり、ヴァルター・ウルマンの代表的な概説書はそれを次のように表現している。

「十三世紀の後半からアリストテレスの影響は、一つの概念の革命にまで到った思想の変革をもたらす方向にあった。事実においてもまた理論においても、十三世紀におけるアリストテレスの突然の導入は、中世と近代との間の分水嶺となった。<sup>(2)</sup>」

ここで注意を喚起しておきたいのだが、このような見方のうちには、中世の政治思想の研究に取り組みに際して、ややもすると、足を掬われかねない一つの陥穽が待ち受けている気がするが、どうだろうか。

すなわち、ここでは中世政治思想史における十三世紀後半の「アリストテレス革命」のインパクトが強調され、そ

れが近代政治思想への思想的回路となつてゐることが指摘されている。しかし、そのことが過度に強調されすぎると、「古代」のアリストテレスと、「近代」政治観念との中間に横たわる長い「中世」という時代にさまざまに展開された政治的諸観念や思考に内在する固有の意義への探求が閉ざされる虞れが生じるのではないだろうか。

というのはこういうことである。言うまでもないことであるが、アリストテレスの『政治学』は「政治」や「国家」が人間にとつて「自然的なもの」——「人間は自然的に政治的動物である。」(Politics)——であることを説いていた。他方、近代の政治観念もこれも言うまでもないが、人間にとつて、「政治」や「国家」が神学や宗教、道徳から解放された、きわめて世俗的、自然的なものであることを大前提としてゐる。

この点において、「近代」と「古代」の政治思想は軌を一にする面をもつわけであるが、この側面に過度に固執すると、「中世」政治思想研究を推し進めて行く問題意識と方法はしばしば以下のようなものとなりがちである。すなわち、そこでは、中世政治思想はそれ自体が研究の対象とされるといふよりも、近代的政治原理を生み出す母胎ないしは前提としてのみ意識され、近代の自然的、世俗的あるいは自律的な政治・国家観念が生じるのは中世の、一体、いつ、どのような時期であるのか、そしてまた、それを促した思想的契機としてのアリストテレス政治学は一体、いつ、どのような形で西欧中世において「復活」したのか、という点に注目することである。そして事実、従来の研究はこのような「近代的政治・国家諸観念の中世的起源」を遡及的に問うという方法的パラダイムをその主流としてきたのである。

こうした方法的パラダイムの孕む大いなる問題性については、稿を改めて検討することにした。いま重ねて確認しておきたいのは、ウルマンやルビンシュタインに見られるような、中世における政治思想の自律的展開は十三世紀中葉のアリストテレスの『政治学』の翻訳によって初めてなされたにすぎないとする見解は一般に現在においても、有力とされている事実である。ここでは、そうした見解を共有する他の中世学者や政治思想家たちについて一々言及

することは避けたい。だが、今日、最も影響力のある政治思想家として著名なクエンティン・スキナーの、これまた有名な著作の一節を引用しておくのは、あながち無駄なことではあるまい。

「近代政治思想の基礎を発掘しようとするあらゆる試みは、アリストテレスの『政治学』の再発見と翻訳をもって始まる必要があるし、また政治哲学はそれ自身の権利において研究に値する独立したデイシプリンを構成するという観念の再出発もまさにそうである。」<sup>(3)</sup>

ところで、近年の中世政治思想史研究の動向を注視してみると、中世政治思想の自律的展開をアリストテレス政治哲学の本格的な流入を見た十三世紀後半以降に機械的に求めるような傾向をなしとしない従来の見解は、もはやそのままの形では鵜呑みにできない状況となりつつあることを指摘しないわけにはいかない。これは端的に言えば、西欧の十二世紀という世紀の固有に有する豊かで、多面的な思想世界の姿が徐々に私たちの前に立ち現れて来つつあることの必然的なコララーであると言つてよいであろう。そこには、「十二世紀ルネサンス」の発見者、C・H・ハスキンズ以来の、地道で、息の長い実証的な中世研究が存在することは言うまでもないことである。

まえおきが長くなった。単刀直入に語ろう。ルビンシュタインによって、中世政治思想の歴史のなかで十三世紀以前に見られる、単なる例外的なエピソードと片付けられているかに思えるソールズベリのジョンは、*politicus* という言葉に、一体、どのようなイメージを描いていたのだろうか。あるいは、ジョンにとって、*politicus* という言葉の「意味の世界」は、一体、どのようなものだったのだろうか。こうした問題を考えることは西欧の十二世紀に展開された独自の政治思想をその全体像において捉えようとすることを意味する。当然のことながら、ここでは多角的な角度からのアプローチが必要となるであろう。以下において、私たちはこの問題に近づく一つのアプローチとして、ジョンとアリストテレスとの関係を、とくにその政治的徳性の議論を中心に考えてみることにしたい。

## II ジョンとアリストテレス

十二世紀の傑出した人文主義者、ソールズベリのジョンはその主著『ポリクラティクス』<sup>(4)</sup>全巻を通して、*politicus* やそれと関連する同種の言葉を使用している。ルビンシュタインは上述のごとく、二つの例を指し示しているが、けっしてその例だけにとどまるものではないことを確認するために、まずジョンの使用法をアト・ランダムに書き出してみよう。

「異教の哲学者たちは、人間の国家(*res publica hominum*)がそれに従ってまさに存在し栄える、政治的(*politica*)と呼ばれるあの正義(*iustitia*)を、命令や慣行によって作り上げる一方で、各人は彼自身の状況や環境に満足すべきことを教えている。」(I, 3)

「『怠け者よ、蟻のところに行ってみよ。その道を見て、知恵を得よ。』(箴言)6:6とソロモンは言う。しかし、哲学者は政治的人間(*vis politicum*)を蟻たちのもとに送り込み、彼が蟻たちからその義務を学ぶように仕向けた。」(VI, 24.)

「我々は、ソクラテスが政治体制(*res politica*)の枠組みを作って教え、自然の泉から流れ出ると同様に、知恵の泉から流れ出ると言われる戒律を指し示したことを知っている。」(VI, 25.)

「私の仕事はむしろ政治状態にある人間の生活(*vita politicum*)を分析することである。」(VII, 17.)

このような具合に『ポリクラティクス』のなかに、私たちは *politicus* やその関連語を幾度となく目にするが、そうした事実を単に確認して驚くだけの話であれば、上述のルビンシュタインの問題意識とさして変わらないことになってしまふであらう。

そこで、私たちはこの『ポリクラティクス』(*Politicus*)なる書物の題名自体にまず注目しておく必要がある。そ

れは一体、どのような意味をもつものなのか。別の機会に触れておいたが、実は、それはギリシア語の「ポリス  $\text{πολις}$ 」(*polis*) + 「クラティン *κράτειν*」(*to govern*)の合成語として作られたものである。このように、書物の題名にギリシア風の語をつけるのは十二世紀には一種の流行であった。例えば、アンセルムスの『モノロギオン』や『プロスロギオン』、サン・ヴィクトルのフーゴーの『ディダスカリコン』、ベルナルドゥス・シルヴェストリスの『メガコスムス・エト・ミクロコスムス』、コンシユのギョームの『ドラマティコン』などみな然りで、ジョンのもう一つの主著、『メタロギコン』もまた同じである。

そうだとすれば、容易に気づくことであるが、ジョンは既に古代の *polis* についての知識を有していたのであり、*polis* から派生する *political* やその関連語を彼が用いて政治の議論を展開しているとしてもなんら驚くには当たらないのである。

「異教の哲学者たちは、人間の国家 (*res hominum*) がそれに従ってまさに存在し栄える、政治的 (*politica*) と呼ばれるあの正義 (*iustitia*) を、命令や慣行によって作り上げながら、各人は彼自身の状況や環境に満足すべきことを教えている。彼らは、都市や都市の周辺に居住する人々 (*urbani et suburban*)、また、農夫や田舎に住む人々 (*coloni vel rustici*) にその居住すべき特定の場所やなすべき仕事を命じている。各個人と市民の団体は公共の福祉 (*utilitas publica*) に心を配っている。各人はそれぞれの長所に従って、自然の恵みや、労働と勤勉によって得られる物を受けている。隣人愛が保たれているので、誰も、隣人の財貨を奪う者はいない。都市における支配的、中心的な場所は、アレオ・パゴス (*Areopagos*) に捧げられている。そこから、健康や生命の流れのように、行為を命じる法が個々の職業に従事する者たちのもとに流れ出ている。……」(I, 3)

これは本節の冒頭で、その最初の言葉を既に引用しておいた第一巻第三章——「古代人の政治組織の機能分割について」という副題をもつ——の続きの一節であるが、見ての通り、*polis* についてのジョンの知識がけっして通り一遍



のものでなかったことがよく理解されよう。

ところで、これまでのジョンに関する研究史において、ほぼ共通の了解事項とされてきたのは、彼が先行する四つの主要な知的伝統の影響を受けているということである。すなわち、(一)キリスト教正統思想の基礎をなす聖書および教父の文献(二)文芸、法学、哲学に関してのラテン思想家たちの著作(三)政論家・教会人の論稿(四)初期中世以来、実質的に消滅していたが、ジョンの時代に西欧社会に再び流布し始めていたアリストテレスの文献である。このうち、前の三つについては、それなりの研究の蓄積が見られるが、(四)のアリストテレスの影響に関しては、<sup>(6)</sup>いまだ本格的な探求がおこなわれていないというのが実情である。

実は、この側面から見ても、アリストテレスの真の影響は、こと政治思想・哲学のレヴェルに限る限り、『政治学』の翻訳(ラテン語訳)が果たされた十三世紀後半にもっぱら見られるのであって、それ以前にはほとんどありえないとする予断や臆断がまかり通ってきたのがわかる。だが、それはともかくとして、アリストテレス『政治学』発見の一世紀前に生きたジョンは、「政治」の問題に関して、アリストテレスからなにも学ばなかったのだろうか。

ここで私たちは、十二世紀の知的世界に既にアリストテレスの「オルガノン」(organon)の実質的な部分が紹介されており、この世紀を代表する知識人、ジョンもそれに十分に精通していたという事実を想起しなければならない。改めて指摘するまでもなく、「オルガノン」はアリストテレスの哲学体系の支柱をなし、言語と論理学を扱った著作群——すなわち、『カテゴリー論』、『命題論』、『分析論前書』、『分析論後書』、『トピカ』、『詭弁論駁論』——を指すが、このうち『カテゴリー論』(De categoriis)と『命題論』(De interpretatione)の二書はボエティウスのラテン語訳によって初期中世の間に広く知られていた。その他の著作がどの程度までラテン語訳で流布していたか、そしてまた、ジョンの同時代人たちがそれらをどこまで利用できたか、については確証が掴めない。ハスキンスズやコプレストンといった先駆的学者はその他の部分が一一二八年頃までには消化・吸収されていたという見解を示しているが、<sup>(7)</sup>最近の研

究ではそれは認められないものと見なされている。<sup>(8)</sup>

しかしながら、ジョン自身は「オルガノン」のほとんどの著作に通じていたようである。その点は研究者の間ではほぼ意見の一致を見ているところであり、たとえば、本格的なジョン研究の草分けの一人で、『ポリクラティクス』と『メタロギコン』の校訂注釈書を著したウェブはこの点をこう述べている。「我々の著者はまことに『オルガノン』という表題で総称的に知られている全著作への精通ふりを示している最初の中世ラテン作家である。」<sup>(9)</sup>

実際、論理学擁護の目的をもって執筆された学芸論書『メタロギコン』<sup>(10)</sup>を繙くと、私たちはそこにアリストテレスという名と、彼の「オルガノン」の諸書への言及が著しいことに気づく。たとえば、そのことは全四巻で、章立てで数えれば、全九七章からなる『メタロギコン』のなかで、「オルガノン」について論じている章が実にそのうちの二六章、全体の四分の一強に及んでいる事実明らかである。そればかりではない。つぎのような一節に目を落としてはいい。

「人が哲学的探求を正しく推し進めたいのなら、他のすべての学問分野を構成し、組織しているだけでなく、その必要条件でもある論理学を卑しめることは正気の沙汰ではない。最も鋭く、最も勤勉な哲学者たちを含む、多くの著者が論理学についてなにごとかを書いてきているのであるから、それを非難する人々は明らかにそうしたすべての著者たちを相手に批判していることになる。……アリストテレス、アプレイウス、キケロ、ポルフィリウス、ボエティウス、アウグスティヌスは、エウデムス、アレキサンドロス、テオフラストスと同様に、……みなきわめて熱心に論理学の旗をいわば諸学問のなかの至高のものに引き上げた人々である。これらの著者はそれぞれに卓抜な人々であるが、みなアリストテレスの足跡を注意深く追うことに誇りをもっている。そういうわけで、哲学者(philosophus)という共通の名称がとりわけて素晴らしいものとしてアリストテレスのために取って置かれるにいたったのは正しいことである。というのも、アリストテレスは換称によって、あるいは特別なこととして、『哲学者』(philosophus)と呼ばれて

いるからである。」(II, 16.)

周知のように、西欧中世において「哲学者」と言われれば、それはアリストテレスを指すというのは常識の域を出ないことであるが、しばしば、それはアリストテレス哲学の総体的な受容を見た十三世紀以後の現象とされるがごとき誤解がなきにしもあらずのことを想えば、ジョンが上述のごとく、「アリストテレスは『哲学者』と呼ばれている。」という言葉を吐いているのは注目に値しよう。ついでながら、この *philosophus* という表現は『メタロギコン』の他の箇所にも、『エンテイクス』のなかでも使用されている<sup>(1)</sup>。そして同様に、政治論書『ポリクラティクス』のなかにおいても見いだすことができる。

「アリストテレスは逍遙学派を築いたが、それは、彼があちこち歩き回りながら、議論をするのを常としていたことから、そう名づけられたのである。彼はその大いなる名声と説得術を通して、彼の師の存命中でさえ多くの弟子たちを説き伏せて自分の説を受け入れさせた。彼は実際、哲学のあらゆる分野について論じ、それぞれの分野に関して原理を打ち立てた。それ以上に、彼は、その博識振り<sup>(2)</sup>で他のすべての哲学者を締め出していたように見える、彼自身の学問領域のなかにさえ合理的なものをもちこんだ。しかし、哲学者たちの間に大層な評判を得ていたので、彼は自分の名をすべての哲学者を指し示す同義語として打ち立てさせるに十分に値する人物である。都市(*urbes*)という言葉がローマに発する<sup>(3)</sup>ように、また、詩人(*poeta*)という言葉がウエルギリウスから出ているように、『哲学者』(*philosophus*)という言葉もアリストテレスに集中することになったのである。」(III, 6.)

このように見てくると、ジョンが「政治」の問題に関して、アリストテレスからまったくなんらの影響も受けていないなどという即断を下すのは当面、差し控えねばならないことに私たちは気づく。しかし、それでは、西欧中世において、アリストテレスの政治学説の導入は『政治学』と『ニコマコス倫理学』のラテン語訳の出た十三世紀後半以降のこととする見解がこれまでの通説とされてきたなかで、少なくとも、その二書の「発見」以前にその生涯を終え

ていたジョンは、一体、どのようなかたちで「政治」の議論を知っていたのだろうか。

### Ⅲ ジョンの政治論における「中庸」の徳

ここにおいて、私たちは一つの予断から自由にならねばならない。その予断とは、なにか。それは、アリストテレス政治哲学の核心を読み取ることでできる書物はただ二冊、すなわち『政治学』と『ニコマコス倫理学』以外にはありえないとする予断である。

この点において、近年の中世政治思想史研究の動向のなかで注目すべきは、ケアリ・ニーターマンの一連の精力的な仕事であろう。彼は中世政治思想に与えたアリストテレスの影響に関する従来の通説に対して果敢に挑戦を試みているが、その初期の論稿「ソールズベリのジョンの『ポリクラティクス』におけるアリストテレス主義」(一九八三年)のなかで、次のように述べている。少々長くなるが、引用してみよう。

「より広い見地に立って言えば、知識や徳について触れているアリストテレスの観念が『ポリクラティクス』のなかで使用されている事実は、『オルガノン』が通常認められている以上に、アリストテレス思想を理解するための相当に豊かな資料を中世に提供したことを我々に思い起こさせる。アリストテレス哲学が、その主要著作のラテン語への再紹介とともに、十二世紀後半から十三世紀の初頭にかけて大量に流布していったのは確かであるが、それにもかかわらず、ひとり『オルガノン』だけは単にその論理学や言語に関する観念に限定されるのではない、アリストテレス思想の本質的要素を、初期の思想家たちが瞥見することを可能にしていた。我々がアリストテレスとジョンとを比較検討してみれば、十三世紀に先立つ西欧中世の知的歴史において、アリストテレスの存在を実質的に無視し、イスラムの伝達者たちを通して彼の再発見がおこなわれたことを最重要視する一般の見解に対して、それを部分的に修正する

ことになるだろう。というのも、『カテゴリー論』と『命題論』(『オルガノン』)のこの他の著作は十二世紀に紹介されたが、アリストテレスに負うところのあるラテンおよびキリスト教のテキストと一緒にあって、中世を通じて流れる、一種の *underground* なアリストテレスの伝統の基礎を形成しているからである。アリストテレスの知識はその主要著作が不在の時期にはほとんど存在していないと異口同音に主張されている一方で、実は『オルガノン』はずっと後でのみ復活したと見なされてきた多くのアリストテレス的洞察力をもたらすのに役立っていたのである。<sup>(12)</sup>

ニーダーマンはこのように述べて、既に『政治学』や『ニコマコス倫理学』の導入以前に、西欧の知的世界において、アリストテレスの *underground* の伝統が存在していたと言<sup>(13)</sup>う。そして、それは『カテゴリー論』と『命題論』を中心とする「オルガノン」であって、そこに窺われる道徳・倫理理論の断片的な知識に基づいて、ジョンは自己の政治論を構成していったというのである。

確かに、私たちが『ポリクラティクス』全巻に丹念に目を通していくと、『メタロギコン』の場合とは異なって、ここにアリストテレスの名前が登場する数はさほど多くはないのが事実としても、彼の影が色濃く落ちているのを感じないわけにはいかない箇所が見つかることがある。たとえば、それはジョンが「中庸」の徳について語っている次のような場合である。

「もし誰かが中庸(modus)を逸脱すれば、その人は間違った道へ進むことになる。すべての徳(virtus)はそれ固有の目的のうちに限られており、中庸さ(modus)に存する。もし人が限界を越えれば、その人は道を踏み外し、道の上にはいないのである。」(III, 3.)

「哲学者は次のように言っている。すなわち、限界を越えたものに気をつけよ。なぜなら、人がこの慎重な中庸さ(modestia)を捨てるならば、それだけその人は徳の道(traimes virtutis)から不注意にも逸れてしまうからである。」

(IV, 9.)

「戦闘の遂行と流血をもっぱらとする武装した手がある。君主の叡知と正義(*sapientia et iustitia principis*)は、この手を君主が中庸ち(*moderatio*)をもって使用するときに見れる。」(Ⅷ, 2.)

念のために言えば、ここで「中庸」と訳しておいた *modus, modestia, moderatio* という言葉は、両極端を排する「中間」という意味も内包しているが、見ての通り、ジョンはこれらのなかで、中庸ないし中間ということが人間にとって大切な「徳」(*virtus*)にはかならず、それは「叡知」(*sapientia*)や「正義」(*iustitia*)として現れると述べている。

さて、このような議論を見ると、私たちはそれがいかにもアリストテレス的であると感じると同時に、ローマ共和制末期の文人政治家、キケロの存在をも思い浮かべないわけにはいかない。ジョン研究者たちの間では、言わずもがなのことであるが、ラテン古典に造詣の深い人文主義者、ジョンに与えたキケロの思想的影響は計り知れないものがあったからである。実際、ハンス・リーベシュッツがつとに指摘しているように、「古代の道徳的教説に関してジョンが最も頼りとした典拠は、キケロの『義務について』であった」し、その「キケロの『義務について』の大きな主題は、『ポリクラティクス』の政治的命題<sup>(4)</sup>であった。それゆえ、ギリシア哲学から大いに学んで、人間のもつべき四つの枢要徳——すなわち、「勇氣」、「慎慮」、「節制」、「正義」——を人間倫理の本質として説いたキケロの『義務について』を読んで、ジョンもまた、次のような発言を『ポリクラティクス』のなかに記しているのを見ても別段、驚くには当たらない。

「これら不正や詐欺、傲慢などさまざまな悪徳は、それが生じたとき、すべての支配者、の王座を覆すものである。なぜなら、君主の栄光はそれらの正反対のものによって永続されるものだからである。詐欺(*dolus*)は弱さの仮面であり、臆病の似姿であり、勇氣(*fortitudo*)と真向から対立するものである。傲慢(*contumelia*)は慎慮(*prudencia*)によって抑制される。慎慮は『なぜ塵と灰は塵と灰に対して傲慢であるのか』と永続的に問いかける。不正(*iniustitia*)は節制(*temperantia*)によって禁じられる。節制は他者から受けることを望まないことを他者に対して強いるのを好

まない。そして、不正は正義(*justitia*)によって排除される。正義はあらゆることにおいて、他者にしてもらいたいと望むことを他者にすることである。これらは哲学者たちが『枢要』(*cardinales*)と読んだ四つの徳(*quattuor virtutes*)にほかならない。」(IV, 12.)

このように、ここで、ジョンは明らかにキケロに依拠しつつ、抽象的な人間一般にはなく、はっきりと支配者・君主に向かってそのもつべき徳性(四枢要徳)について語っている。これを読めば、ジョンをして上述のような言葉を吐かしているのは、間違いなくキケロにほかならないという印象をもったとしても、無理はなからう。しかも、はたせるかな、そのキケロは人間の情念を抑制し、安定をもたらず「中庸」の原理としての「フルガリタス(質素)」(*frugalitas*)<sup>(15)</sup>という徳の観念の大切さをその『トゥスクルム談義』のなかで取り上げ、さらに『義務について』<sup>(16)</sup>においてもそれのように詳述しているのである。

「第一に戒心すべき点は、われわれの厚情も能力を超えてはならないことである。事実がゆるす以上に懇切でありたいと願う人たちは、近親に対して不法をおかすという点において先ず誤りをおかす。近親の人たちの用に立ち近親の人たちに相続されて然るべき財産を、彼らは他人の手に渡すからである。しかしこういう寛大さには、鷹揚にふるまう手段を満たすために不法をおかしても強掠収奪せんとする欲望がひそむことが多い。それで、本心から寛大であるよりむしろ何かの栄光を求めて、ただ親切の見えを張るため、本心よりも外見のために、さまざまのことをする人たちをわれわれは多く見ることが出来る。こういう姿勢はむしろ虚栄に近く、それは、寛大にも道德的な高貴さにも遠いといわなくてはならない。」

ついでながら、ジョンもまたその「フルガリタス」という中庸の徳について、『ポリクラティクス』のなかでとくに一章を設けて論じているのを付け加えておこう。

「一体、だれが質素(*frugalitas*)を称賛しないであろうか。誰がそれを必須のものと思わさないであろうか。私は質

素を、私が我が儘なために称賛していないと非難されないように、私は質素が寛大さと両立しないことはないと思信じて認めていると公言する。私の証人はキケロとユリウス・カエサルと、誰もそれを怠っていると非難しない他の人々である。この後者の誤りに対しては、多くのことが述べられた。寛大さの諸義務については、『義務について』を熟読すれば、容易にそれを知ることができよう。(III, 13)

しかしながら、四枢要徳や、中庸・中間という徳性の議論に関して、ジョンに与えたキケロの影響の大きさ、確かさについては疑いの余地を差し挟むことはできないとしても、それをもっぱらキケロからの借用と解して済ますならば、浅見の誇りを免れまい。というのも、言うまでもないことであるが、そもそも哲学史の教えるように、「徳」(ἀρετή)という観念は「善」(ἀγαθόν)や「幸福」(εὐδαιμονία)と共にギリシアの倫理学の基本語の一つであったからである。それはホメロス以来、道徳的な意義に限定されない、人間のもつ伎量や知力の側面、つまり「力量」とか「器量」あるいは「卓越性」という意味を内包しているが、やがてプラトンが四つの倫理的徳目(四枢要徳)を説き、アリストテレスが必ずしもそれに縛られない徳目一覽表を提出したことはよく知られている。<sup>(18)</sup>そして、実は、その徳目一覽表を用いている書の一つが『ニコマコス倫理学』<sup>(19)</sup>であり、ほかならぬその書の第二巻において詳論されているのが何事につけ、両極端(過・不足)の中間を保つことの大事さを説く「中庸」・「中間」(μεσότης)という徳の倫理なのである。すなわち、有名な「徳」の定義を含むその一節には、こう述べられている。

「こうして器量 (徳) (ἀρετή)・筆者注」とは、選択にかかわる性向であり、「この性向において」われわれに対する中間を保たせる性向のことである。われわれに対する性向とは分別にしたがって規定された中間、すなわち、賢慮あるひとがそれにしたがってこれ「中間」を規定するであろうような、そういう分別にしたがって規定された中間である。中間を保つとは二つの悪徳の中間を保つこと、すなわち、一方の、過剰による悪徳と、他方の、不足による悪徳の中間を保つことである。さらにまた、器量が中間を保つことであるのは、悪徳が情と行為に関して、或る場合には、あ



るべきものに不足し、或る場合には、あるべきものを越えるのに対して、器量はその「あるべき」中間を見出し、これを選びとることによるのである。したがって、そのものの実体、すなわち、『そのものも』もともと何であるか〔本質的存在〕を言う定義にしたがえば、器量とは『中間』である。」(Ⅱ, 6, 1106b36-1107a2)

そして、このことはまた、『ニコマコス倫理学』においてだけでなく、『政治学』<sup>(20)</sup>においても同様に語られている。『倫理学』において幸福な生活とは徳に従ってなにもにも妨げられずに営まれる生活であり、そして徳とは中間であると言われたが、もしこれが正しいならば、中間の生活が「大多数の人々にとって」最善の生活でなければならぬことになるからである」(Ⅳ, 11, 1294a37-38)

「われわれは両極端の間にある中庸を称賛して、それを追及しなければならぬと主張する。」(Ⅲ, 7, 1342b12-13)

このように見てくれば、『義務について』のなかでキケロが *moderatio, mediocritas, modus* というラテン語で表現した内容がアリストテレスの言う *μεσότης* (中庸・中間) を指していることは明らかであろう。そして、実際、キケロはそのなかで、この徳についてアリストテレスに学んでいることを自ら次のように認めているのである。

「処罰に際して特にさげなければならぬのは怒りである。怒って処罰に臨んでは、過不及の中間にあって逍遙学派の人たちがよしとする中庸 (*mediocritas*) を得ることができないであろう。」(Ⅰ, 25, 89)

さて、ジョンの述べている中庸・中間という道徳的教説に関して、その典拠が実際はキケロに、というよりもアリストテレスにあることは、以上の点からほぼ明らかであろう。しかし、それでは、ジョンはその教説をどのようにして学んだのだろうか。再三にわたって繰り返し返しているが、ジョンはいまだ『ニコマコス倫理学』と『政治学』の完全な受容を享受できる立場にはいなかったのである。そして、その答を解く鍵がすなわち、「オルガノン」の存在にほかならない。

IV おわりに——ジョンの政治論と「オルガノン」

既に私たちはジョンがボエティウスのラテン語訳を中心として成り立つアリストテレスの「オルガノン」の諸書を読んでいたことを知っている。果たして、「徳」とは「一つの悪徳の中間を保つこと」であり、「一方の、過剰による悪徳と、他方の、不足による悪徳の中間を保つこと」であるとするとアリストテレスの道徳的教説、「中庸・中間」の徳性の議論はこれら「オルガノン」のうちに見いだせるのだろうか。

結論から先に言えば、それは十分に可能である。まず、そのいくつかの例を引用してみよう。『カテゴリー論』<sup>(21)</sup>のなかで、次のような言葉を読むことができる。

「しかし善いものには必然的に悪いものが反対である。そしてこのことは個々のものによる帰納によって明らかである。例えば健康には病気が、正義には不正義が、勇敢には卑怯が反対である。しかし悪いものには或る時には善いものが、或るときには悪いものが反対である。というのは欠乏は悪いものであるが、これには悪いものであるところの過剰が反対であるからである。しかし同様にまた、善いものであるところの中庸<sup>(22)</sup>(*mesotês*)がこの両者のそれぞれに反対である。」(14a2-6)

また、『トピカ』<sup>(22)</sup>では、次のような条が見いだせる。

「たとえば、『適度のもの』(*μετρώδης*)における場合がそうである。なぜなら、適度のもも、『善い』[もの]と「言われるからである。」(107a11-13)

「避くべきことは避くべきことに反対ではないように思われる。一方が過度の点で、他方が不足の点で言われるのではないならば。なぜなら、過度は避くべきものに属すると思われし、不足もまた同様だからである。」(113a2-7)

「不足と超過は、同じ類のうちにある——なぜなら、悪(の類)のうちには両方があるから——がしかし、これらの

もの中間にある過度なものが悪（の類）のうちにはなく、善（の類）のうちにある。」(123b27-30)

以上は、「中庸・中間」、そして「善」の概念が窺える箇所であるが、「徳」という概念そのものについても、「オルガノン」の諸書はなんらかの説明を与えているだろうか。この点においても、『ニコマコス倫理学』での有名な定義（第二巻第六章）に合致する言葉を「オルガノン」に見ることが出来る。その定義については既に引用済みであるが、念のため、いま一度確認しておこう。

「器量（徳）とは選択にかかわる性向であり、「この性向において」われわれに対する中間を保たせる性向のことである。われわれに対する性向とは分別にしたがって規定された中間、すなわち、賢慮あるひとがそれにしたがってこれ〔中間〕を規定するであろうような、そういう分別にしたがって規定された中間である。」

このように、アリストテレスによれば、「徳」とは「選択にかかわる性向」、しかも「中間（中庸）を保たせる性向」のことである。ここで「性向」という訳語をあてられているのは *εἶσις* というギリシア語であるが、それは「性格のあり方（性状）」、「習性」あるいは「状態」と訳される。後世、ボエティウスや十二世紀の翻訳者たちはこれを *habitus* というラテン語——ここから英語の *habit* という訳になる——に置き換えたが、いずれにせよ、そこにあるのは徳とは単に道徳的に善き行為を一時的に選択すればよいというのではなく、その道徳的選択を絶えず実践し続けることよって、一定した性格のあり方、習性になるところまでいかなければならないということである。したがって、超過と不足という二つの両極端の悪徳を排して、その中間を不断に意志的に選択し続けていく性向、これがアリストテレスのいう中庸の徳の意味にはかならない。<sup>(23)</sup>

こうした *εἶσις, habitus* としての徳の定義を「オルガノン」に見いだすのは容易である。たとえば、『カテゴリー論』には

『性質』と私が言うのは、それに基づいて何か或るものが『これこれ様の』と言われるところのものである。しか

し性質はいろいろな意味で言われるものどもに属する。ところで性質の一つの種類は性状と状態だと言われるとしよう。しかし性状は一層固定的で、一層長続きのするものであることよって状態から異なっている。そして知識や徳がこのようなものである。」(8b27-29)

「人々は一層長時間で一層動き難いものであるところのものは、これを性状と云うことを望むということは、明らかである。」(9a3-4)

あるいは、『トピカ』には

「両者〔徳と知識〕は同じ類に入る。けだし、これらのおおのは、状態であり、心的状態であるから。」(121b27-39)

『状態』は徳の類である。」(144a16)

『状態』は徳がなんであるか〔本質〕を指示する。」(144a17)

さて、これらのわずかの例からでも、既に「オルガノン」のなかに、超過と不足という両極端の間としての中庸の徳や善性というアリストテレス倫理学の基本的な考えが述べられているのが分かるであろう。おそらく、「オルガノン」の諸書を通して、ジョンはこのアリストテレスの中庸の徳という教説の本質を十分に知っていたと推測できよう。そして、実際、そのように考えれば、『ポリクラテイクス』における以下のようなジョンの言葉も、素直に私たちの耳に響く。

「次のような格言がある。『右手に傾いても、左手に傾いてもならない。』と。右手に傾くことは、あまりに熱心に徳そのものに固執しすぎることの意味する。左手に傾くことは、徳の働き——それは中間(modus)にある——において中間を越えることになる。というのも、実際、すべての熱心さは救済の敵であり、すべての超過は誤りだからである。中庸を欠いた善行の実践ほど、始末の悪いものはない。異教の学者の言うように、『賢人は狂人と言われ、義人は不正な奴と言われる。限度を越えて、徳そのものを追及するならば。』」

哲学者は次のように言っている。すなわち、限界を越えたものに気をつけよ。なぜなら、人がこの慎重な中庸さ(modestia)を捨てるならば、それだけその人は徳の道から逸れてしまうからである。ソロモンも言っている。『善人すぎるな、賢すぎるな。』と。徳の女王(regina virtutum)たる正義(iustitia)が超過のうちに滅びてしまうのなら、一体、超過によって進められるものは何なのか。また、至るところで、こう言われている。『過剰な謙遜は、最大限の自尊である。』と。左に傾くことは、徳の道から悪徳の断崖へと滑り落ちるか、逸脱することである。それゆえ、臣民の過ちを過度に罰する傾向のある場合は、左に身を寄せるようにし、反対に、悪人に対してあまり寛大すぎる場合には、右に向きをかえるべきである。両方とも正しい道から逸れているが、左へ傾いている方がもっと有害である。」(W, 9)

これは「右に傾いたり、左に傾いたりすること、それは君主(princeps)には許されない」と題する章第四卷第九章の全文であるが、ここに窺われるのは明らかにアリストテレスの教説そのものであると云ってよい。文中に言及されている「哲学者」(philosophus)について、『ポリクラティクス』の校訂注釈書を著したウェブはその書の注において、それがアリストテレスを指しているとは言っていない。<sup>(24)</sup>しかし、前出のニードーマンはジョンが『メタロギコン』において、『ポリクラティクス』においても、アリストテレスのことを「哲学者」という言葉で形容している事実から、その可能性のきわめて高いことを示唆しており、その説は非常に説得力に富んでいる。<sup>(25)</sup>

いづれにせよ、ここには、超過と不足の両極端は悪徳であり、それを排して、その中間を選択することこそが徳であるとするアリストテレスの中庸の理論に裏打ちされた考えが述べられていることに疑いの余地はない。そして、実は、ジョンが自分の直接見聞した当時の宮廷社会における宮廷人たちの日夜耽るさまざまな「愚行」(nugae)——すなわち、狩獵、賭博、音楽、演劇、魔術、占星術など——を批判する際に論拠にしたのも、まさにこの考えだったのである。

改めていうまでもなく、『ポリクラティクス』はその副題「宮廷人の愚行と哲学者の足跡」が如実に示すように、そ

うした宮廷人たちの不道徳性に仮借のない批判を加えるとともに、その対極にある古代の哲学者たちの立派な生を描き、そのことによって愚行から解放された、正しい政治家、支配者のあり方を論じているのであるが、そこでの批判の眼目はまさにこの中庸の徳の理論に基づいている。すなわち、ジョンはこれらの娯楽を一律に、絶対的に不道徳と一蹴しているのではない。そうではなく、それらの行為が本来の限度を越えて自己目的化し、公共の秩序に著しく反することになるのを鋭く告発すること、それが彼の狙いだったのである。たとえば、そのことは「狩猟」(venatica)について語っている次の一節に、如実に表現されている。そこに、上述の引用文のなかにあるのとまったく同一の言葉が使われているのに注目されたい。

「〔狩猟〕の場所についても考慮されねばならない。狩猟は獵場、共同ないし公共の土地でおこなわれるべきである。その近隣の人々に被害が及ばず、その場所が神聖な場所であったり名高い所で権利侵害が生じない場合には。なぜならば、そうしたときに侵入者は法の網の目に捕らえられ、罰せられるからである。しかし、中庸さ〔節度〕(moderatio)が守られ、正しい判断と、そして可能なら、利益が上がり、喜劇作家テレンティウスの次のような忠告が守られるなら、狩猟は誉められよう。『万事に中庸が大事。』また、こゝも言われるのは正しい。すなわち、賢人は狂人と言われ、義人は不正な奴と言われる。

限度を超えて、徳そのもの(virtus ipsa)を追及するならば。」(I, 4)

さて以上、私たちはもっぱら「政治的徳性」の議論に的を絞って、『ポリクラティクス』のなかに窺われるアリストテレスの影響如何という問題を探ってきた。この問題が大事なものは、一つには『ポリクラティクス』という書物がそもそも支配者・君主の政治教育を目指す〈君主の鑑〉という性格をもっており、ジョンの描く支配者・君主のもつべき徳性を明らかにすることは当然の作業だからである。もう一つには、それがいっそう大事なのであるが、既に言及しておいたように、西欧中世では真の政治思想は十三世紀のアリストテレスの『政治学』および『ニコマコス倫理学』

の導入をもって始まるとする通説があり、それを再検討する必要があるためである。その結果、不十分ながら、ある程度、このアリストテレスの「発見」以前に生きていたジョンの政治論のなかに、既にして「オルガノン」を通して得たと思われるアリストテレスの政治観念の存在を確認しえたであろう。

もちろん、ジョンとアリストテレスとの関係を問うのであれば、私たちは単に「政治的徳性」の観念にとどまらず、もっと多面的な角度から『ポリクラテイクス』と「オルガノン」の比較検討を企てなければならぬし、キケロやボエティウスのような思想的伝達者との関係を吟味してみなければならぬ。それは今後の課題として重く受けとめよう。ここでは、ただジョンにおけるアリストテレスの影響を多少なりとも確認する——もちろん断片的な確認でしかないが——ことによって、ジョンの政治論の一端を知るとともに、「政治」観念の十三世紀起源説に対する一つの異議申し立てをおこなったにすぎない。

- (1) Nicolai Rubinstein, "The History of the word *politicus* in early-modern Europe", Anthony Pagden, ed., *The Languages of Political Theory in Early-Modern Europe*, Cambridge University Press, 1987, p. 41.
- (2) Walter Ullmann, *Medieval Political Thought*, Penguin Books, 1975, p. 159 [朝倉文市訳『中世ヨーロッパの政治思想』御茶の水書房、一九八三年。一七三頁。なお、引用文中「the watershed between the Middle Ages and the modern period」を朝倉訳では「中世と現代……」と訳しているが、文脈上、これは「中世と近代……」とすべきであろう。本稿では「<sup>2)</sup>改めた。』
- (3) Quentin Skinner, *The Foundations of Modern Political Thought*, Cambridge University Press, 1978, vol. 1, p. 349.
- (4) C. C. J. Webb (ed.), *Ioannis Saresberiensis Polieraticus, sive de nugis curialium et vestigijs Philosophorum libri VIII*, 2 vols, Oxford, 1929.
- (5) 拙稿「ソールズベリーのジョンの『ポリクラテイクス』」(『君主の鑑』8) (『独逸法学』第三十七号、一九九三年) 五二頁。
- (6) たよべは、Hector J. Massey, "John of Salisbury: Some Aspects of His Political Philosophy", *Classica et*

- Mediaevalia*, vol. 28, 1967, pp. 357-72. はジョンの政治思想プロバパーについて扱った貴重な研究であるが、セイバインやウ  
 ォーリンの西欧政治思想の通史がジョンを軽視乃至し閑却している点への指摘はあっても、アリストテレスへの言及はまった  
 くおこなわれていない。以下の代表的な論稿も基本的に同様である。John Dickinson, "Introduction: The Place of the  
 Policraticus in the Development of Political Thought", in *The Statesman's Book of John of Salisbury*, New York:  
 Russel and Russel, 1963, pp. xvii-lxxxii. E. F. Jacob, "John of Salisbury and the Policraticus", in J. C. Hearn-  
 saw, ed., *The Social and Political Ideas of Some Great Medieval Thinkers*, London: Harrop, 1923, pp. 53-84.
- (7) 周知のように、『ホエテリウス訳の『カテゴリー論』と『命題論』以外の『オルガノン』全体のラテン語訳は一二二八年頃  
 マネンヌのカロルスにちかづくギリシア語からなされた。C. H. Haskins, *The Renaissance of the Twelfth Century*,  
 Harvard University Press, 1927, pp. 345-6. (野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社、一九八五年、三〇二-三頁。別  
 宮貞徳・朝倉文市訳『十二世紀ルネサンス』みすず書房、一九八九年、二八六-七頁。) Frederick Copleston, *A History  
 of Western Philosophy*, Part I, Garden City, NY: Doubleday, 1962, pp. 232-5. (箕輪秀一・柏木英彦訳『中世哲学史』  
 創文社、一九七〇年、二二九頁。)
- (8) Eleanor Stump, "Topics: Their Development and Absorption into Consequences", in N. Kretzmann et al.  
 eds., *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, Cambridge University Press, 1982, pp. 273-99. なお  
 十二世紀の哲学史に関する現在の研究の到達点を知りたい者 Peter Dronke, ed. *A History of Twelfth-Century Western  
 Philosophy*, Cambridge University Press, 1988. かなりおもしろく有用である。
- (9) Clement C. J. Webb, *John of Salisbury*, Methuen, 1932, p. 82.
- (10) C. C. J. Webb (ed.), *Ioannis Saresberiensis Metalogicon libri III*, Oxford, 1929.
- (11) *Metalogicon*, IV 7. *Entheticus de Dogmate Philosophorum*, 827, 828 (983B).
- (12) Cary J. Nederman, J. Brückmann, "Aristotelianism in John of Salisbury's Policraticus", *Journal of the  
 History of Philosophy*, vol. 21, 1983, pp. 227-8.
- (13) ニーターマンはこの仮説のもとに、アリストテレスの影響がジョンの政治思想だけでなく、広くその哲学・倫理思想全体  
 に及んでいることを精力的に明らかにしようとしている。それはジョン研究の問題にとどまるだけでなく、従来の中世政治思  
 想研究そのものに対する根本的な挑戦の意味を含んでいる。本稿はこのニーターマンの所説に大いに啓発されていることを断



- 「っておきたい。なお、ニードーマンの多くの論稿については、ここでは一々列挙しない。前掲の拙稿「ソールズベリのジョンの『ポリクラティクス』」の(注89)を参照されたい。
- (14) Hans Liebeschutz, *Medieval Humanism in the Life and Writings of John of Salisbury*, The Warburg Institute, University of London, 1950, p. 79, 80. (柴田平三郎訳『ソールズベリのジョン 中世人文主義の世界』平凡社、一九九四年、一五五頁、一五七頁。)
- (15) Cicero, *Tusculanae Disputationes* III, 16-18.
- (16) Cicero, *De Officiis*, I, 14, 44. (泉井久之助訳『義務について』岩波文庫、一九六一年。角南一郎訳『義務について』現代思潮社、一九七四年。) この訳文は、泉井訳を拝借した。cf. II, 16, 55-57.
- (17) プラトン『国家』第四卷427E『饗宴』196Bff『法律』第一卷 631C-D.
- (18) アリストテレス『エウデモス倫理学』第二巻第三章 1220b37-1221a12. (茂手木元蔵訳『アリストテレス全集14 大道徳学エウデモス倫理学 徳と悪徳について』岩波書店、一九六八年。) 参考までに、その徳目一覧表を書き出しておく。ここでもアリストテレスは超過と不足の中間の徳を列挙している。すなわち、「多怒 寡怒 温和 無謀 (大胆) 臆病 勇敢 無恥 内気 廉恥 不節制 (放埒) 純感 節制 嫉妬 名称なし 義憤 利得 損失 正 (適性) 放漫 吝嗇 鷹揚 高慢 (見栄) 卑下 真実 阿諛 憎悪 親愛 追従 横柄 厳正 懦弱 災厄 忍耐 倨傲 卑屈 矜持 濫費 細かさ 豪壮 邪知 愚直 思慮」。
- (19) アリストテレス『ニコマコス倫理学』(加藤信朗訳『アリストテレス全集13 ニコマコス倫理学』岩波書店、一九七三年。)
- (20) アリストテレス『政治学』(山本光雄訳『アリストテレス全集15 政治学 経済学』岩波書店、一九六九年。)
- (21) アリストテレス『カテゴリー論』(山本光雄訳『アリストテレス全集1 カテゴリー論 命題論 分析論前書 分析論後書』岩波書店、一九七一年。)
- (22) アリストテレス『トピカ』(村治能就訳『アリストテレス全集2 トピカ 詭弁論駁論』岩波書店、一九七〇年。)
- (23) アリストテレスの中庸の徳については、もちろん多くの解説があるが、さしあたり日本語で読める、G・E・R・ロイド、川田殖訳『アリストテレス』みすず書房、一九七三年、一八八頁以下が有用である。
- (24) C. C. J. Webb (ed.), *op. cit.*, vol. I, p. 266. footnote, line 26.
- (25) Cary J. Nedermann, J. Brückmann, *op. cit.*, pp. 215-216.

〔なお、本稿はソールズベリのジョンの政治思想に関する私の研究の全体計画の一部もなすものである。それにともない、(注)の付け方において、いささか不備や統一を欠くところがある。ご海容を請う次第である。〕